
《Blade Of Onlin》

夜兎__✎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。


【小説タイトル】

《Blade Of Online》

【Nコード】

N7059Z

【作者名】

夜兔 

【あらすじ】

VRMMO《Blade Of Online》のサービスが開始された。版のテストプレイヤーの一人になり、このゲームにハマった俺は当然プレイを開始する。しかし《Blade Of Online》はクリアするまでログアウト不能のデスゲームだった。ゲーム1のハズレ武器を選んでしまった俺は他のプレイヤーから相手にされず、しかたなくソロで攻略を始めることにした。だがその途中、俺はバグによって高レベルのモンスターは闊歩するエリアに飛ばされてしまう。果たして俺はこの世界から出ることが出来るのだ

ろ
う
か。

巨大な樹木が並び太陽の光が殆ど入ってこない森の中で、俺は必死にモンスターの攻撃を避けていた。

全身が紅色の堅い殻に覆われた巨大なサソリ、シエルドスコピオンが猛スピードで突進してくる。俺はこの数週間で鍛えられたスキル《見切り》を使用する。《見切り》は発動すると相手の攻撃が来ると思われる場所に赤い線が現れる。俺はシエルドスコピオンの突進を完全に避けられる位置を確認すると、《ステップ》で大きく横に跳ぶ。

シエルドスコピオンはそのまま突っ込んで行き木に激突した。しめた、チャンスだ。

「はあああ！」

俺はシエルドスコピオンの殻の隙間に手にしていた太刀の刃を滑り込ませる。ジューブ、と嫌な手応えが伝わってくると同時にシエルドスコピオンの上に表示されているHPバーが少しずつ減少していく。最初からレッドゾーンだったHPバーが最後まで削られ、消滅する。

シエルドスコピオンはキシアア、と断末魔の悲鳴を上げながら光の粒となつて消滅していった。これがこの世界での死だ。こいつに限らず、俺もHPバーが無くなれば同じように死を迎える。そして生き返ることは二度とない。

レベルアップ音が二連続で響く。シエルドスコピオンを倒したことで経験値が入ったことでレベルが上がったのだ。本来シエルドスコピオンは俺のようなレベルの低いプレイヤーが倒せるモンスターではない。だから一気にレベルが二つも上がった。

なんでそんなレベルの高いモンスターを俺が倒せたかというと、

朝から今までずっと今のシエルドスコピオンと戦い続けていたからだ。因みに、現在時刻は夕方六時半。

あいつの攻撃を避けてわざと樹にぶつけさせて怯んだところを、殻の隙間から刃を差し込んでダメージを与える。これをずっと繰り返し続けた。それで今、やっと倒すことが出来たのだ。

正直、もう立っているのが辛いぐらい疲れている。モンスターを倒すと自動的にアイテムはバッグの中に収納されるようになっていく。もうここに用はない。洞窟に帰ろう。

俺が、いや俺達がこの世界に来てから一ヶ月。

VRMMO《Blade Of Online》のサービスが開始された日から、地獄は始まった。

0（後書き）

どうも夜兎と申します。VRMMOモノを書くのは初めてなので矛盾などが出てしまうかも知れませんが、一生懸命書かせて貰います。誤字脱字、感想など貰えると嬉しいです。

二十年前、軍が訓練のために開発したバーチャルリアリティ技術は今や世界中で使われている。体感型^{ドリーム}仮想空間装置の仮想空間を利用した介護やスポーツなどが進歩していく中、ゲーム技術が取り残されていった。

ビジュアルやデータなどの問題により、《ドリーム》から出ていくゲームはどれもほのぼのとした生活系のゲームばかり。激しいゲームを好むプレイヤー達から、不満の声が上がる。そんな中、あるゲーム会社がVRMMO《Blade Of Online》の開発が成功したことを発表する。プレイヤー達は歓喜し、その発売を今か今かと待ちわびた。

発表から二年後、ゲーム会社から《Blade Of Online》の版が応募したプレイヤーに数量限定で配られた。俺、矢代^{やしろあ}も 版に応募し、抽選に選ばれた。

自分がゲームの中に入りモンスターと戦うというのは、やはり最高に楽しい。俺は 版終了まで毎日何時間もプレイし、攻略していた。

それから二ヶ月、ついに《Blade Of Online》が発売された。

『もうすぐだな』

版で知り合ったガロンというプレイヤーから送られてきたチャットを見て緊張感がより高まる。

《Blade Of Online》のサービスが今日の午後十二時から開始されるのだ。俺は出遅れないために《ドリーム》を頭にセットしている。十二時になった瞬間に電源を入れて出遅れないようにしないとな。

版をやっている分、他のプレイヤーよりも有利とはいえ、おちおちしていればすぐに抜かされてしまう。ゲーム内でガロンとその仲間に合流し、すぐに攻略を開始するつもりだ。

「これで現実から目をそらせる」

俺は《Blade Of Online》のパッケージを眺めながら、そう呟いた。

俺には親が居ない。小さい頃に二人とも交通事故で死んでしまった。まだ小さかった俺と妹の^{しおり}栞は祖母の家に引き取られる事になった。俺はあの時に誓ったんだ。栞だけは何があっても守ると。「^{あかつき}暁お兄ちゃん」と懐いてくる妹だけは、幸せにしてみせると。

それがこれだ。大学受験に失敗し俺は浪人になった。祖母に出して貰った予備校のためのお金で俺はこの《ドリーム》を買った。最低だと思う。高校生になった栞にも軽蔑された。祖母は何も言わず、家でゲームをする俺に料理を付くってくれている。心が痛まない訳じゃない。だけど何かをする気になれないんだ。

そう言えば、栞は今友達の家泊まりに行って居るんだっけ。あいつもゲーム好きだから、もしかしたらその友達と《Blade Of Online》のサービスが開始されるのを待っているかも知れないな。

そんなことを考えてる内に、デジタル時計が十二時と表示する。俺は《ドリーム》の電源を入れ、《Blade Of Online》を開始した。目の前が少しずつ黒く染まり、やがて闇に落ちてい

った。

《Blade Of Online》の世界、ヨーツンヘイムにはモンスターが跋扈する、まだ誰も足を踏み入れたことのない場所がいくつもある。プレイヤー達はその場所を探索し、奥にいるボスマンスターを倒して次のステージに向かっていく事になる。

使用できる武器はさまざまで、片手剣、両手剣、大剣、太刀、斧、槍などが存在する。まだ明かされていない武器もあるようだ。ただしこの世界には魔法という物がない。なのでプレイヤーは武器を手にし、自らの腕でモンスターを倒すことになる。それだけ聞くとあまり面白みのなさそうなゲームに聞こえるが、魔法の代わりに《スキル》や【称号】がある。プレイヤーはこれらを上手く使えるかが勝負の分かれ目となってくる。

武器は最初を選ぶことが出来るが、しばらく変更することが出来ないため慎重にいかねばならない。版で俺が使っていた太刀は全てが中途半端で、ハズレ武器とされている。だが、敢えて俺はハズレを引くね。レベルを上げていけば凄い技が出るかもしれないしな。

《Blade Of Online》のスタートメニューで太刀を選ぶと、ようこそブレイド・オブ・オンラインへという文字が浮かび、俺は眩い光に包まれた。

1（後書き）

誤字脱字、感想を頂けると嬉しいです。

2（前書き）

短くてすいません。次回から多くなっていく予定です。

目を開くと真っ白な壁に覆われた大きな部屋の中にいた。周りには俺と同じプレイヤーが立っており、隣の人と何やら話していた。人の気配や熱気までリアルに感じられる。《ドリーム》のゲームって気配とか熱気とか細かい所にリアリティが無いから、やっぱ《Blade Of Online》ってすげーんだなあと再確認する。

つか、みんな大剣とか槍で武器に太刀を選んだ奴が全然居ないぞ……。版をプレイした奴が作った攻略WIKIに、太刀はハズレ武器って書かれてたけど、そんなにハズレなのか……。確かに攻撃力でもリーチでも攻撃速度も全部半端だけどさ……。しかも結構扱いが難しいし。だけど敢えて太刀にしようってプレイヤーはいないのかよ……。きつと俺以外にも居るんだろうけどこりゃ相当少ないかもな。

この部屋に入れられてから十分程して、プレイヤーの一人が悲鳴を上げた。周りがそれに注目する。

「ログアウト出来ねえぞ!？」

そんな馬鹿な、とステータスを開き、画面の右上に表示されるログアウトボタンを探す。……無いぞ。嘘だろ。

周りのプレイヤーがざわざわと騒ぎ出す。折角のゲームだって言うのに運営がいきなり転けたな。というかいつまでこの白い部屋に入っていないきゃいけないんだよ。このまま出られないのではないか、そんな考えが頭をよぎる。

その時、部屋の壁に四角いスクリーンの様な物が現れた。画面にはテレビの砂嵐のように白い線と黒い線が動き回っている。プレイ

ヤー達が黙ってそれに注目していると、そこから低い男の声が流れ始めた。

『約一万人のプレイヤー諸君、これから私が言うことを良く聞きたまえ。ログアウトボタンが無いのは運営のミスではなく、最初からそういう仕様になっているからなのだ』

プレイヤー達が再び周りと話し始める。

どういう事だ。ログアウトボタンが無いのが仕様？　つまり故意にログアウトボタンを消したのか？　訳が分からない。

早いところガロンと合流したいが、この部屋にいる人間はかなり多い。ここから探し出すのは難しいだろう。

『それと現実世界からの干渉はほぼあり得ない。この世界では君たちの思考が《加速》されている。詳しい説明は省かせてもらうが、この世界での一年は現実世界での一秒にも満たない。ゲームを攻略せずにここから出られるとは思わないことだ。

プレイヤー達から上がる怒声や悲鳴を無視し、スクリーンからの声は続く。

『それとこの世界での死は現実での死に繋がる。君達プレイヤーの命、HPバーが無くなった瞬間、現実世界での君達の脳に特別な電波が送られ、ショック死する』

空気が死んだ。今まで面白半分に騒いでいた連中も顔を引きつらせ、スクリーンを凝視している。俺は現実で死んだような生活をしてきたからこっちに来てても変わらない、なんて考えは浮かんでこない。やべえぞ、これ。嘘だろ？

『諸君らに伝えることはこれで終わりだ。最後にこのゲームを作った者の一人としてアドバイスをしておこう』

今まで無機質で淡々と喋っていた男の声に、僅かに楽しんでいるような色が混ざる。

『ここにいるプレイヤーは様々な武器を選んだことだろう。大剣、斧、槍、片手剣、両手剣、そして……太刀。プレイする前に攻略サイトを見ていた者は知っていると思うが、太刀はハズレ武器だ。威力では大剣に劣り、リーチでは槍に劣り、持ち運びやすさでは斧に劣り、手数では片手剣と両手剣に劣る。外見から太刀の方が片手剣より強そうなイメージがあるかもしれないが、片手剣は攻撃力は低いが空いた手に盾をもてるし、動きやすい。つまり太刀は全武器の中で一番弱い武器だ。これから命をかけてゲームをするのだから、仲間はよく選んだ方が良く。太刀なんて選んで足を引っ張られたら目も当てられない』

え？　ちょ、待ってくださいよ運営さん。太刀、そんなに弱いんですか？　こんなに格好いいのに？　つかなんでそんな武器作ったんですか？

周りのプレイヤーが一斉に俺の方を見てくる。視線には同情と蔑みが含まれていた。いや、お前らもそんな真に受けんなよ！

『ではこれより君達を最初の街の広場に転送する。そうしたら即行動に移すことをおすすめる。ポップするモンスターは無限ではないから経験値を稼ぎたいのなら迅速に行動することだ。では、命運を祈る』

スクリーンが消え、再び眩い光に包まれた。

N a m e :	暁
L v 1	
W e a p o n :	太刀『錆びた刀』
S k i l l :	
T i t l e :	
P o w e r :	10
S p e e d :	10
P e r s e v e r a n c e :	10
S t a m i n a :	10
D e x t e r i t y :	10

2（後書き）

S k i l l はスキル、T i t l e は称号です。P o w e r は筋力値、S p e e d は俊敏さ、P e r s e v e r a n c e は耐久値、S t a m i n a は体力値、D e x t e r i t y は器用さです。これらは作中では基本的に日本語で書くつもりです。なんで英語にしないかというと、ややこしくて間違えるような気がするからですwすいませんw

誤字脱字、感想を頂けると嬉しいです。

俺が太刀を選んだのはハズレ武器だからというだけじゃない。ハズレに挑戦してやる、という気持ちがあったのは嘘ではないが本当の理由は他にある。それは、俺が剣道をやっていたからだ。太刀の長さや形が剣道でよく使う竹刀や木刀に似ていたため、振り慣れている物に近い武器を選んだ方がプレイしやすいと思った。だけど、まさかその選択のせいでこんな事になるとは思わなかった。

ヨーツンヘイムの世界でプレイヤーが最初に訪れる街の名前は《セーフティータウン》。その名の通り、モンスターが近寄らない安全な街だ。未攻略エリアを攻略するとそこに新しい街を作る事が出来るため、中盤あたりには全く使われなくなるだろうが、序盤ではプレイヤー達の拠点となる重要な街だ。

《セーフティータウン》に転送されたプレイヤー達の行動は三つに別れた。すぐにソロでエリア攻略に動き出す者、仲間を募集してパーティーを組む者、助けが来ると信じて何もしない者。俺は助けが来るとは思わなかったし、版をプレイしているとはいえ単独で行動するのは危険だと思ったので仲間を集めることにした。したのだが……。

「ガロン、なんでだよ！　一緒にパーティー組もうって言ったじゃないか！」

《Blade Of Online》のプレイヤーのために作られた大きな掲示板を利用し、ガロンとその仲間三人と合流したのは良かったのだが、仲間にはなれないと断られた。理由は太刀だから。太刀がハズレとはいえ仲間が多い方が良く、と反論のだがガロンの仲間の一人が「お前は信用できない」などと言いやがった。ガロン

とこの仲間達は他のゲームで知り合い、何度も現実であつて居るらしい。版で知り合っただけの俺に背中を合わせる危険は犯せないんだと。まあ街を出てモンスターが出るエリアに行けばPKプレイヤーキリングが出来てしまうので警戒するのは分かるけど……。酷すぎるぞ……。

ガロンの背は百八十？を越えており、百七十五？ほどの俺は見下るされる形になる。背中に背負っている大剣と合わさって凄まじい迫力だ。ガロンは申し訳なさそうに、だが有無を言わさぬ口調で「すまない」と頭を下げると仲間と共にどこかへ行ってしまった。

因みにこのゲームは顔や髪の色など細かいところは変えられるが、骨格は大きく変えられない。何故なら、骨格を変えて身長を高くしたり低くしたりすれば重心がズレ、上手く動けなくなってしまうからだ。俺は顔とか髪は殆ど弄っていない。まあ今はそんなことはどうでもいいや。

「おい、あいつ太刀だぜ」「運営側にまであそこまで言われるって……」「仲間にしたら足引つ張られそうだよな」

俺の姿を見たプレイヤー達は皆馬鹿にしたような視線を向けてくる。嫌な予感がした。

その嫌な予感はすぐに的中した。誰にも仲間になつて貰えないのだ。太刀と言うだけで避けられ相手にされない。ありえねえ……。いくら運営があんな事言つたからってこれは極端すぎる。この非常に慎重になるのは分かるけど、そこまでしなくても言いジャン……。絶対仲間は多い方が良いんだしさ……。

それから一時間程度街をウロウロして仲間を作ろうと頑張ったが、全て断られてしまった。ならば同士を、と太刀の人を探してみたがソロで攻略しに行ったのか、上手く仲間を作れたのか、宿に引きこもっているのか、どこにも居なかった。

……。

これは正直マジでやばい。ソロで動くにも出遅れてるし、仲間も出来ないしやばい。宿に引きこもる気は全くない。

掲示板で仲間を募集してみたら、『太刀使い乙wwww』とか『暁必死だなww』とか書かれていた。掲示板は名前を出すことも匿名にすることも出来るため、俺の募集に書き込んだ奴らはみんな匿名だった。最悪だ。結局仲間見つからなかったし。

しばらく呆然としていたが立ち止まっているわけにも行かないので、版の知識を生かしてエリア攻略に行くしかない。どうせレベル上げに丁度良い場所はもうプレイヤーでいっぱいだろうし……はあ。

第一攻略エリア《ワイルドフォレスト》にいるモンスターは大して強くない。だが囲まれてしまえば終わりだし、レベル1で行くには危険だ。だが仕方ない。この太刀使い暁が一人で攻略してやろう。NPCがやっているショップに行き回復薬などを揃え、俺は《ワイルドフォレスト》に出発した。のだが、その途中で妹にあった。

「朶？」

「兄さん……」

妹も外見を殆ど変えていなかったようで、一目で分かった。流れるような黒髪と雪のように白い肌、スツと高い鼻。同じ親から生まれたとは信じられないほどの美人だ。やはりゲーム好きのお前もこれをやっていたのか……。

妹の周りには、妹と同じ高校生ぐらいの女の子二人と男が二人いた。パーティーを組んだのだろう。勿論この中に太刀使いは居ない。妹は片手剣使いだ。

「兄さん？ こいつもしかして掲示板で馬鹿にされてた太刀使いじゃ……」

男の一人が困惑したように妹に話し掛けるが、妹はそれを無視して俺を睨み付けてきた。その迫力に思わず後ろに一步引いてしまう。

「現実でも役立たずの貴方はこっちでも役立たずだったようですね。誰にもパーティーを組んで貰えなかったみたいですが当然です。私達もあなたをパーティーに入れるつもりはありませんので。話し掛けないで下さい」

周りの仲間が「良いのか？」と聞くが妹は何も言わず、俺に背を向けて歩いていつてしまった。仲間は妹と俺を見比べ、しばらくして頭を下げると妹について行ってしまった。

俺はしばらく呆然と立っているしかなかった。他のプレイヤー達に見捨てられるのはまだ良い。だが肉親である妹にまで見捨てられたというのは結構堪えた。何もせず祖母の家で金を貪っていた俺が悪いとはいえ、今は命に関わるかも知れないという緊急時だ。それなのに見捨てられた。悲しみと同時に怒りが沸き上がってくる。

「……行くか」

妹のことは取り敢えず後回しにしよう。今は攻略の方が大切だ。

《ワイルドフォレスト》に 版で出てきたモンスターは、スライム、巨大芋虫クローラー、グリーンスマイル、フロートボールの四種類だけだ。最奥部に居るボスはハングリーツリー。

ボスとはかくとして出てくるモンスター単体ならレベル1でも何とか倒せる。ただしモンスターが一体とは限らない。囲まれたら大分厳しいだろう。

ゲームの中だからかイマイチ緊張感が足りない気がするが、《ワイルドフォレスト》の入り口が見えてきたあたりで気を引き締める。中には多くのプレイヤーが居るだろうが、基本的に自分の力で進まなければならない。パーティーなら別だけど……。

「ん？」

入り口の手前の空間が微妙にひび割れていた。ゲームによくある背景がおかしくなるやつか。最先端のVRMMOとはいえ、まだ完全じゃないようだ。これって触ったらどうなるんだ？ ひび割れていた部分を指でツン、と突いてみるとその部分から全体が砕けていき、大きな穴が出来た。

「なんだこ、れ！？」

穴の中を覗き込もうとした瞬間、何かに引っばられるように中に引きづり込まれた。穴はどこかに繋がっていたようで、俺は頭から真っ逆さまに落下していった。

おい運営。バグくらいちゃんと直せよ……。

3 (後書き)

誤字脱字、感想を頂けると嬉しいです

地面に叩き付けられた痛みを堪えながら、何とか立ち上がる。それから高いところから落ちるとダメージを受けるのを思い出し、HPバーを確認したが変化はなかった。バグのお陰かどうかは知らないが、どうやら落下ダメージは無かったようだ。それなら落ちたときの痛みも無しにして欲しかったな。

それにしてもここはどこだ？ 巨大な樹が生えていることから森の中というのは分かるが、《ワイルドフォレスト》にこんな場所はなかったはずだ。それに雰囲気が違う。上手く説明できないが、ここは嫌な空気が流れている。何かが潜んでいそうな、いるだけで不安になってくる。

現在地点を確認するためにステータス画面を開いてみる。頭の中で出てこいと念じるだけでステータス画面を出すことが出来る。視界に現れると言うよりは脳内に表示されると言っただ方が正しいのかも知れない。ステータス画面は自分以外の人間には見ることが出来ないし。

ステータス画面には自分の現在地点を確認できる機能が付いている。俺は自分の居る場所を確認して顔を顰めた。

ブラッディフォレスト
現在地点。

どこだよ。 版でプレイしたときにこんなダンジョンは発見されなかったぞ。 と言うことは少なくとも《ワイルドフォレスト》よりはモンスターのレベルが高いと言うことだ。これはやばいかも知れん。下手したらモンスターから一発攻撃されるだけで即死、なんて事もありえる。

しばらく周りを見回してみたが樹のせいで遠くに何があるのか分からない。葉の隙間から僅かに漏れている太陽の光がいつなくなる

とも分からんし、動くしかないか？

この世界はリアルだから朝昼晩と時間の流れがちゃんとあるし、季節や天候も変化する。今は昼過ぎだろうか。夜になれば視界は最悪だし、夜行性のモンスターもいるかもしれない。

しょうがない。探索するとするか。

バキバキバキと樹の枝が折れる音に続き、獣の低い唸り声が響く。それからシャカシャカと地何かが地面を移動する音が聞こえ、地面が震える。

俺は苔生して緑色になった樹の後ろに隠れ、モンスター同士の戦いを見ていた。緊張のせいで荒くなった自分の息と心臓の音がうるさい。

しばらく森を探索していると巨大な熊のようなモノが寝ているのを発見してしまった。地面の上で大の字になっていびきをかいているそれは、間違いなくモンスターだ。それもレベルの高い。

モンスターはHPバーの上に名前が表示されるようになっていた。ただし、モンスターのレベルが自分よりかなり上の場合、『？？？』と表示されるようになっていた。この熊のHPバーの上にはハテナマークが浮いていた。つまり俺よりもレベルはかなり上だ。

今寝ていると言うことは夜行性のモンスターだろう。刺激を与えなければ起きることはない。触らぬ神にたたり無し、ここはスルーしていこう。

そう思っていると、いきなり紫色の液体が熊の腹部に付着した。何かが溶ける音がして熊のHPが僅かに減る。

熊が起きた。

おもむろに立ち上がって血走った目を見開き、大きな口を開いて咆哮する。そのあまりの迫力に俺は立っていることが出来なかった。

その場で膝をついて耳をふさぐ。恐らくこの熊は威圧系のスキルを持っているのだろう。威圧系は自分よりレベルが低い者の身動きを鈍くする。

想像以上にやばいな……。もし見つかったら逃げることも出来ずに殺される。

咆哮が終わった熊は自分の眠りを妨げた者を睨み付ける。視線の先にいたのはこれまた大きなサソリだった。熊よりは小さいがサソリの常識から考えるとかなりでかい。全身が紅色の殻で覆われている。かなり堅そうだ。

サソリは三体おり、六本の足を使って熊を取り囲んだ。サソリもレベルが離れているようで名前が表示されない。どうやらこの森にいるモンスターは俺のレベルを遙かに上回って居るみたいだな……。おい運営早く助ける。

睨み合う熊とサソリ達。先に動いたのはサソリだった。もの凄い勢いで一斉に熊に突進していき、その鉄で殴りつけた。熊のHPが一割ほど減る。熊は自分の正面にいるサソリに向かって爪を振り下ろした。鉄と鉄をぶつけたような鈍い音が響き渡る。やはりサソリの殻は堅かったようだ。それでも攻撃を受けたサソリのHPが30%ほど削られていた。恐るべし熊の攻撃力。

熊の攻撃は止まらない。他の二匹にも爪を叩き付ける。両腕をブンブンと振り回しながらサソリを殴りつける熊。結構シールドだ。サソリも負けていない。瘤のついた尻尾の先端を熊に突き刺す。熊のHPが減少すると同時に紫色に変色する。毒状態だ。やっぱ毒をもってやがったか……。

毒状態になるとHPが少しずつ削られていく。毒消しを飲めば消せるし、しばらく立てば毒状態からも解放されるのだが、強敵と戦っている時に毒状態になるのはまずい。

熊とサソリの戦闘が始まってから十分。三体のサソリはHPは半分ほど削られていたが、熊のHPを半分以下のオレンジ色まで減らしていた。熊の毒状態は治ったものの、サソリの方が圧倒的に有利だ。

三方向から鋏で殴られたり肉を引きちぎられたりして、ついに熊のHPがレッドゾーンに突入する。樹の影からこっそり覗いている俺はサソリの勝利を確信した。

その時。

グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

咆哮の後、熊の全身が真つ赤に光り出す。目は真つ赤に輝き、牙は伸び、口が大きくなる。なんだこれは。こんな現象は見たことがないぞ……。

熊がサソリの一体を殴りつけた。頑丈な殻が粉々に砕け散り、サソリはHPバーを全て削られた。残りのサソリは尻尾で突き刺して熊を毒状態にしたが、その後殻を砕かれて死んでしまった。光になって消えていくサソリ達。熊は勝利の雄叫びを上げた。

今の俺があんな化け物に勝てる訳がない……。いくら体力が殆ど
0でもあのサソリ達の殻を粉々にしたあいつに近づきたくない。毒
状態も治ってしまったし、しばらくすればHPが少しずつ回復して
いくだろう。その前に早いところ逃げよう……。

立ち上がるため、今まで隠れていた樹に手をつく。すると湿った

「あ」

どういう訳か、樹は腐って脆くなっていたらしい。そのまま倒れていく。その先には全身真っ赤な熊さんが。樹が熊に当たって砕ける。

やべえっ、気付かれる！ 急いで逃走しようとした俺の耳に、熊のどこか哀しげな叫びが聞こえた。恐る恐る振り向いてみると、熊が光の粒となって天に昇っていく所だった。

え？

レベルアップ音が脳内に響いた。というよりはもの凄い連続して聞こえてきた。

ポーン、レベル1になりました。ポーン、レベル2になりました。ポーン、レベル3になりました。ポーン、レベル4になりました。ポーン、レベル5になりました。ポーン、レベル6になりました。

版の時は聞こえただけで飛び跳ねて喜んだ電子音が続く。

……………。

その後、音はレベルが26になった所で止まった。続いて脳内に文字が浮かび上がってくる。

スキル《ステップ》《ジャンプ》 固有スキル（ユニークスキル）
《二段ジャンプ》に変化しました《隠密》《見切り》《察知》《受け流し》《ライト・スクエア》《クリア・スタブ》《兜割り》《抜刀斬り》《剣士の迫力》を会得しました。

称号【闘士】【下克上】【隠密者】【???】を獲得しました。

もう訳が分からん……。

あの熊のHPはサソリ達によって本当にギリギリまで削られていたようだ。倒れてきた樹にぶつかっただけで死んでしまうほどに。それと俺の凄まじい勢いでレベルアップには理由があった。モンスター同士が戦った場合、勝者は倒したモンスターの経験値と幾つかのアイテムを自分の物に出来るのだ。いくらレベルが離れているとはいえ、熊一体であそこまでレベルアップする筈がない。サソリ達の間も含まれていたようだ。

と、俺はあの後探索して見つけた洞窟の中で先程の出来事を自分の中で整理していた。この洞窟はどうやらプレイヤーのための休憩地点のようだ。洞窟内は温かく奥の方にわき水が溜まっている。入り口のすぐ側に生えている樹には何種類かの果物もなっていたし、何よりモンスターが入れなくなっている。ステータスから見る事が出来るマップは、この洞窟をモンスターが侵入できない、安全を表す青色で表していた。

「ふう……」

洞窟の壁にもたれ掛かり一息つく。

色々なことがありすぎて頭がおかしくなりそうだった。だが、こんな時こそ冷静にならなければならない。取り敢えず熊を倒したことでアイテムボックスにアイテムが入っている筈だ。まずそれを整理しよう。

ボックスの中には《セーフティタウン》で買った大量の回復薬や解毒剤などの他に見たことのないアイテムが入っていた。

所持品：回復薬×10、解毒剤×5、スタミナドリンク×5、赤

熊の毛皮×2、赤熊の爪、赤熊の生肉×4、太刀『血染め桜』、紅殻蠍の剛殻×7、紅殻蠍の鋏×3、紅殻蠍の毒尾、紅殻蠍の毒肉×10、魂の欠片×10

どうやらモンスターの一部が大量に手に入ったようだ。この手のアイテムは武器や装備を作ってくれる鍛冶屋に持って行くと、モンスターに応じた武器や装備を作ってくれる。まあ未攻略エリアにはそういった店はないからハッキリ言って今はゴミだな。

因みにアイテムの解説を見て分かったのだが、あの熊の名前はブラッディーベアーで、サソリの方はシールドスコピオン亜種らしい。亜種って何だよ亜種って。

モンスターの一部を今はただのゴミと言ったが、肉系のアイテムは違う。このゲームには空腹の設定があり、定期的に何かを食べないとステータスにペナルティを負ってしまう。最終的には餓死してしまうとか。さっきみつけた果物以外に食べる物が無い俺としては、肉は命を繋ぐ大切なアイテムだ。ただ毒肉って書いてある方は食べると数秒間毒状態になってしまう……。

「おお……」

そして太刀『血染め桜』。ごく僅かな確率でモンスターから武器や装備を手に入れられる事があるが、まさかいきなりゲット出来るとはな……。今俺が装備している太刀は『錆びた太刀』。かなり頼りない。ゲットできたのはかなりの幸運と言える。ただ、武器を使用するには“筋力値”が必要になる。

重い武器を装備して振るには当然筋力がある。筋力値とはプレイヤーの筋力を表すステータスの一つだ。筋力値が高ければ攻撃力も上がるし、鍛えておいて損はない。

筋力値の他にも“俊敏さ”“耐久値”“体力値”“器用さ”と色々あり、どれもレベルを上げていけば自然と鍛えられていく。レベ

ルを上げる以外にも鍛える方法があり、筋力値と耐久は武器で素振りしたり筋トレをする事で、俊敏さと体力は動き回ること、器用さは武器を作ったり鍛冶をしたりすることで上げることが出来る。レベルとこれらのステータスを上げていくことが、このゲームの醍醐味だ。

少し話がずれたが、取り敢えずしばらくは武器に不足はない。と言っても筋力値を上げる必要がありそうだが。

後は魂の欠片。これは即死攻撃を受けたとき、HPを10まで回復する事が出来るアイテムだ。版の時は入手することはなかったが、かなりのレアアイテムと聞いている。もちろん使い捨てだ。

アイテムは大体把握できたし、次はスキルと称号だな。

スキルとはプレイヤーのHPバーの下に表示されるスタミナバーを減らす事で使用できる特殊技だ。普通の人間では出来ない素早い動きや攻撃、防御などを可能とする。中にはスタミナを消費しないスキルもあるが、大体はスタミナを使う。スタミナが無くなればスキルが使えなくなり、回復を待つしかない。

スタミナはHPと同じでレベルアップすれば送料が増えていく。体力値を上げることでスタミナは増やすことが出来る。

スタミナを使い切ってしまったときは、自然回復の他にスタミナドリンクを飲むことで回復することが出来る。スタミナが切れるとピンチになるのでスタミナドリンクは欠かせないアイテムの一つだ。

「さてと……。どれどれ会得出来たスキルはつと……。うお!？」

固有スキル《二段ジャンプ》だと……。マジか……。いきなり固有スキルゲットとか幸運すぎるだろ……。《二段ジャンプ》はジャンプした後に空中でもう一度ジャンプすることが出来るという便利なスキルだ。固有スキルとはとても珍しいスキルの事をさす。会得条

件は全て不明。他のプレイヤーが使っている固有スキルを手に入れることは殆ど不可能に等しい。

他にゲットしたスキルも戦闘ではかなり便利な物ばかりだった。初めて見るスキルも幾つかある。今この森から出ることが出来たらトップランカーになれるんじゃないか？

因みに今の俺は他のプレイヤーの様子を知ることが出来ない。さつき掲示板を見ようとしたらエラーという文字が表示された。クソ、バグのせいかな。運営エ……。時間を加速するとかそんな技術使う暇があったらバグくらい消せよ……。

次に称号。これはプレイヤーの行動がその称号の入手条件を満たしているかと手に入れることが出来る。持っているだけでステータスが上がったりするので手に入れておいて損はない。

でも今回手に入れた称号、俺何にもしてないのに入手条件が満たされていたのか？ バグによってここに来たのだから変なことがあるかもしれないからな。

【闘士】は頭を使って自ら手を下さずに何体かモンスターを倒した場合に手に入る。器用さがあがる称号だ。確かにブラッディベアを倒すときに手は下してないけどさ……。

【下克上】はその名の通り自分よりレベルの高いモンスター、もしくはプレイヤーを倒したときに手に入る。ステータスが全体的に上昇する便利なスキルだ。これは結構入手にくい称号なのでラッキーだったと言える。

【隠密者】……これは 版では出てこなかったから入手条件は分からないな。俊敏さを上げ、《隠密》の効果を上げる力がある。

最後だが……。【???】。これはよく分かん。説明には何も書いてないし、バグのせいなのか？

取り敢えずこれでブラッディベアを運良く倒せた事によって手に入れたアイテムやスキルを一通り整理できた訳だが……。

俺、これからどうしたらいいんだ？

赤熊の生肉を頬張りながら、俺はこれからの事を考えていた。夜になったようで外はもう真っ暗だ。大きな何かが動き回っている気配もするし朝までは出ない方が良さだろう。今日はそのまま洞窟の中にいよう。

赤熊の生肉はとても美味かった。食感はふにやふにやで生肉そのものだが、何故か塩胡椒の味が付いていて食べられた。現実なら食あたりとかになりそうだがこの世界ではそんな物はないから大丈夫だろう。一口食べるたびに全身に力が漲ってくるようだ。スタミナが僅かに増えていくのが見える。きつと焼いたり料理した方が美味しいのだろうが、道具がないのだからしょうがない。そう言えば料理用のスキルとか合ったはずだし、もしこの森から抜け出すことが出来たら調べてみるか。

「はあ」

こんな化け物だらけの森から本当に出られるのだろうか。外に出るだけでも命懸けだというのに。恐らく今の俺ではブラッディベアーはおろかシールドスコープオン亜種（次から面倒なので普通に呼ぶ）にも勝てないだろう。『血染め桜』はかなり強いだろうが必要筋力値が高くて今の俺には使いこなせないだろうし、スキルも上手く使いこなせないだろう。レベルが上がったとはいえ筋力値などのステータスは殆ど上がっていない。今の状況で外に出るのは自殺行為だ。

はあ。考えるのは明日にしよう。肉を食ったお陰で腹もふくれたし、眠くなってきた。今日は取り敢えず眠ろう。

翌朝、熊肉を食べて湧き水で喉を潤した俺は『血染め桜』で素振りをしていた。かなり重くて少し振っただけで手が痛くなってきたが、振り続ける。

急に素振りを始めたのにはちゃんと理由があり、剣を振ることで筋力値や体力値を上げることが出来るし、太刀の熟練度を上げることが出来るからだ。熟練度とはその武器をどれだけ使いこなせているかを表した物だ。ステータスも熟練度もモンスターと戦った方が上がりやすいけど、戦ったら瞬殺されそうなので地道にトレーニングしていくしかない。頑張ろう。

昼。熊肉を食べて少し休憩した後、今度は手に入れたスキルを使って練習を始めた。スキルも熟練度と同じように使えば使うほどレベルが上がっていく。スキルレベルが上がれば効果が上がるので、どんどん使った方が良い。

《ステップ》を使って何度も何度も色々な方向に動き回り、スタミナが切れたら休憩して回復させる。その後《二段ジャンプ》を何度も何度も使う。《二段ジャンプ》は一回飛び上がった後、まるで空中に足場があるかのようにもう一度跳ぶ事が出来る。これは結構スタミナを使うようで、すぐに休憩しなければならなくなった。

一つのスキルで体力が尽きるまで練習し、スタミナが回復したら違うスキルを使う。これを何回も何回も繰り返す。

「《ライト・スクエア》！！」

発動と同時に剣が青色に輝き、四連続で目の前の空間を斬り付ける。ライト、と付いているように威力はそこまで高くない。その代わり、消費するスタミナが低く何発も使うことが出来る。何発も使えと言っても、スキルを一度使うと一定時間次のスキルを発動できなくなるので途切れ途切れだが。

こうしてトレーニングをしていると、あっと言う間に夜になってしまった。全身が筋肉痛で痛い。クソ、筋肉痛とかこんな設定要らないだろ！ リアル過ぎるぞ……。

最後の熊肉を食べ湧き水を飲んだ俺は疲労によつてすぐに眠りに落ちていった。

次の日、あのサソリの肉を食べるのはどうも気が引けるので、洞窟の前に生えていた木の実をいくつか取ってきた。三種類ある。

「……………」

三種類の木の実の内、一つしかまともなのがない。ファイルの実は体力を回復してくれる木の实だが、残りのボレロの実は食べると毒状態に、ビレレの実麻痺状態になることが分かった。出来ればファイルの実だけを食いたいところだが、これらの果物は一日三つずつしか採取できないみたいだ。果物一つだけではお腹はふくれないうし、ボレロの実とビレレの実も食べないと空腹からは逃れられない。

……取り敢えず、朝はファイルの実を食べておこう。ビレレの実の麻痺状態は体力には影響ないから安全地帯のここなら食べても問題ない。ボレロの実の毒状態も体力が0になるまで続くことはないだろう。だが朝から食べるのはモチベーションが下がるので、ファイルの実を二つ食べておくことにした。

昨日と同じように昼まで素振りをし、ビレレの実を三つ食べる。全身が痺れて動けなくなつたが数分の事だつたし、空腹はちゃんと解消された。それからスキルのトレーニングをする。

夜はボレロの実を三つとファイルの実を一つ食べた。毒状態は全身が熱くなり胸がじくじくと痛んだ。幸いなことに毒状態は短くファイルの実を食べれば大体回復することが出来た。空腹も解消できたし、

もう寝よう。

それから俺は毎日果物を食べながら素振りやスキルの練習をし、ステータスを伸ばしていった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7059z/>

《Blade Of Onlin》

2011年12月25日19時55分発行